

～ 帯に短し痛い虫 ～

内田 昭憲

大きく両手を広げたキリストさんが、コルコバードの丘からオリンピックの熱い闘いを見下ろす 2016 冬のブラジル。

ちょうどそのころ地球の裏側では、痛みをこらえながら発疹と熱く闘う男がいた。そこは例年になく暑い、夏の札幌である。

ことの始まりは、左足の中指（第三足指）にできた黒い点がいつの間にか水泡となり、痛痒くなったことからだ。

かかりつけの皮膚科を受診すると、先生いわく「う～ん。取りあえず水虫の軟膏を塗っておきましょう・・・」。

ところが水疱は一向に良くならないばかりか、痛くて足を着いて歩くことさえままならない状態になってきた。左足をかばっていると、腰から下の脚全体がまことに不具合。なんだか熱っぽいような気もする。風邪をひいたときのあのザワザワ感が左脚全体を移動する。夜は眠れないほどの神経痛が走り、QOLは極めて悪い。

発症から3～4日経つと、もう満足に歩くことは出来ず足を引きずり始めた。そして、腿の裏側と足裏にポツポツと更なる発疹が発生。よく見ると発疹は列をなして並んでいる。

これを見て男はハタと気がついた。「これは尋常ではない。あれかもしれない」それは忘れもしない 45 年前、ローカル局から本社に転勤になった暑い夏に発現したあれである。

痒い・熱っぽい・ザワザワする。そして、とにかく痛い！！

あいにくその日は、かの「水虫先生」は休診で、急遽近くの皮膚科へかけ込むと「・・・帯状疱疹ですね」。そうか、やっぱり。

発疹は帯状に並んでいるし、体の左側だけにある。教科書通りの診断というものだ。あの夏は右の背中だった。

痛くて寝返りも打てない。暑い夜をのたうち回ることもできず唸っていたものだ。

普通は3週間から1ヵ月で治癒するという。

今回は初診から7日間、抗ウィルス剤をのんだところで「これで治療を終わります」といわれた。

水虫の軟膏なんて勘弁してくださいよ。水虫と帯状疱疹ではお天道さんとカメくらいの違いですよ。センセ！

帯状疱疹は一般に老人病だが、若いときにかかるとう免疫が出来る・・・と言われているが、じつは数パーセントの確率で再発があるそうである。不発弾が一発爆発するようなもの。終戦の日のころの暑い夏に出やすいとか（?）。

二度あることは三度あると言うが、もう金輪際ご免だ。二度あったことは三度は起こらない、と信じよう。

たった1ヵ月、歩けなかつただけなのに地下鉄の階段で息切れがした。

足が上がっていない。この1ヵ月は、踏み台昇降とスクワットをしていなかったからだ。このままじゃ階段でつまずくか、踵を引きずる年寄り歩きになるだろう。

それだけは避けたい。

この男、スポーツと言えば冬の歩くスキーしかやっていない。考えてみれば、あれって「すり足」だったよね。足を引きずるスポーツだ。

アスリートなんか目指していない。TOKYO 2020 は「生きて見られるかどうか」の問題なのだ。地味でいいのだ。

○ シムなど行かなくてよい。

△ 踏み台昇降でいいからね。

☆ がんばろうぜ、ご同輩。

追記：“水虫先生”の名誉のために

先生の診断は誤診ではありません。あの段階では帯はきわめて短く虫のようなものでした。

たまたま、手元にあった油性の塗り薬が水虫の薬だった、というだけのことなのです。

北海道民放クラブ